

攻撃・闘争と男らしさ—いくつかの論点

Johan Galtung

暴力は、他者を心身ともに傷つけ、自分自身もまた傷つけるだろう。それは、ネガティブなコミュニケーションの形である。暴力は、被害者の身体と精神と魂に影響を及ぼす。暴力は、それをふるう人間の身体と精神と魂から引き起こされるのだ。それが身体的暴力であろうと言葉による暴力であろうと、あるいは暴力的な身ぶりや表情にしても。その結果、暴力的な気質や行動を通して表現されるところには矛盾がある。どんな場合においても、身体と精神と魂が暴力の部分を作っていることは明らかである。それは、加害者にとっても被害者にとってもである。私の友人の一人は、誰かに軽蔑的なあるいは傷つけるようなことを言われた同じ日に胃が痛くなった。直接的な身体への暴力とともに、心にわき上がるネガティブな感情や精神あるいは魂(の傾向)、また傷つけることへの欲望は、しばしば重要な役割を果たす。しかし暴力は、(加害者の暴力への)特別な感情なしに、自然に習得されるために、しばしば組織化されることがあるし、構造的である。人は、集団的な暴力(例えば、第3世界の搾取)に加担しているということに気づいてさえいないかもしれない。

ジェンダーの視点からこの問題を見てみよう。それぞれの性に特殊な暴力のタイプがあるだろうか—被害者(暴力を受ける側)と加害者(暴力を仕掛ける側)の両方において。直接的な身体的暴力については明らかな事実がある。犯罪学においては、暴力的な男性と女性の比率が 25:1 であることがわかっている。(これは女性が男性からの暴力をよるこんでいるかどうかという点についてはふれていない)。その解説は、男性の平均した身体的強さや男性の特別な教育や役割パターンの変化などに基づいている。しかし、言葉の暴力についてはどうだろうか。もし女性が、あらゆることが平等だとして、より多くの語彙を獲得していて、より早く話せて、また、脳の情緒的な中枢と言語中枢の間のよりよい連関を獲得しているとすれば、対立する状況にある女性が彼女の優越性として言葉の暴力を使い、彼女がその男性について思ったことを正確に表現することはあり得ることではないだろうか。さらに、言葉の暴力は、裁判で見られるような明らかな身体的傷跡を残さないという利点がある。このことは、この形態の(言葉の)暴力が、処罰されることを免れるということの意味する。言葉の暴力は、男性の自負心を深く傷つけることができる(「あなたは決し

て私を満足させられない」、「なぜあなたはもっと昇進できないの」、「彼はあなたより短時間でもっと多く稼いでいるわ」、「あなたの友人は、私に言い寄ってきたことがあるのよ」などといった言葉で)。

もし仮に、男性が一般的に身体的暴力の領域において優位だとすると、私たちは次のような仮説に直面する。つまり男性は、言葉の暴力を習得できないので、身体的な暴力で反応するのではないか。こうした、原型的な関係が基本的な仮説としてあげられる。暴力がふるわれるようなそれほど不快な関係において、女性は言葉の暴力をふるう傾向があり、男性は身体的暴力を、あるいは両方の暴力をふるう傾向がある。両者は、比較して有利な方を利用しているのだ。

私は各国にいる友人や同僚の女性の間では、話し合いが望まれるということに気づいた。彼女らは男性が苦手な話し合いをしようと努力する。そして彼女はその状況を悪用する。その女性が自分自身の優越性を認識していないとしてもである。その結果、女性は、男性が逃げ出すか、怒り出して逆上するまで、言葉をまくし立てることになる。それは彼が言葉を失ったからでもある。

女性が言葉の暴力を用い男性が身体的暴力をふるうというこの規則性に対する例外は、その規則性と同様に興味深い。しかしまず最初に、このことが今日の北欧の男性に何をもたらしているのかを問うてみよう。ノルウェーでは、おしゃべりな男性に対する懐疑的態度が広く行きわたっている。「彼は寡黙な男だ」というのは「彼は行動で示す」ということを意味し、これは讃辞である。少ない言葉数は、よく吟味された上で発せられた言葉だとみなされる。男性は、彼の言葉通りに善良でなければならない。女性に対してはそのような期待はない。言葉が銀だとすれば沈黙は金である。だから、二人の関係において、女性から男性への「銀」の絶え間ない大きな潮流がある。一方で男性は、男性から女性へ「金」が絶え間なく流れていると言うだろう。「沈黙は金なり」というのは、疑いなく男性によってつくられた言葉であろう。

男性と女性の言葉はまた、ここで重要な役割を果たしている。もし女性の言葉が男性の言葉よりも全体的だとすると、したがって直線的ではなくより描写的で、前提から推測されることに基づいて結論を明白にし、より間接的で循環的だと仮定すると、男性は女性の話を「おしゃべり」と見なすだろう。男性はそれを鶏舎から聞こえてくるぺちやくちゃ、ぎゃあぎゃあといったおしゃべりだと思っており、湧き出る言葉は、特に彼に関することについては、男性がそれをほんとうに重要だと実感するまで言われ続けられるだろう。女性は男性の話を、単調でうんざりするような、冷たいものだと見なすだろう。男性は話を事実や問題点だけにしぼるので、その説明は省かれる。さらに女性は、時間を費やし一緒に

過ごす方法として会話を使う。したがって、男性が性的に言い寄ることは、現実逃避でありコミュニケーションを恐れているように見える。

今、これを階層の観点からみると、その理論は女性の言語の優越性、そこには女性がすすんで言葉を使うということも含まれるが、それは社会のあらゆるレベルで、しかしそれほど高くない階層で維持されている。しかしながら、男性の身体的優越性は、男性がすすんで身体を使うということも含み、これは衰えつつある。この男性の身体的暴力と女性の言葉の暴力の悪循環は、低い階層により共通しているようである。高い階層では、男女とも言葉の領域で争うだろう。そしてそこから、そのやり方で争うことは、相互に罵り合う「精神的虐待」となる。そうした妻から逃れるように、男性は、彼の仕事、会議、恋人、趣味に引きこもり、全く受動的にまくし立てられる言葉を受け入れる。これは、日本の男性がごく最近まで、夜に同僚と飲みに行き、接待し、深夜に帰宅し、翌朝疲れていることがよくあるのはなぜなのかということの説明を可能にするかもしれない。その状況は、ごく最近まで、ずっと女性によって引き起こされていたのではないだろうか？それは、ソクラテスがクサンティッペから逃れるためになぜ毒を飲んだのか、誰が彼を失ったのかということの説明することが可能かもしれない。

戦争と官僚政治、つまり直接的、構造的暴力の通常の活動は、多くの男性にとって明らかに、そして直接的に親和的なものだ。それは男性の領域としてそれらを守るために闘争する理由なのか。(また、EU(欧州連合)に統合された北欧諸国における男性のウーマンパワーからの飛翔の理由なのか)。男性支配社会は、そこでもまた役割の分配が男性によって行われるが、家父長制よりもずっとよい。それは、男性が暴力を抑制することができ、同時に正当な形でそれを表現できる階層レベルにおいては、行動上の序列に関して言えば明らかに推論的な表現は排除される。

これに関して何ができるか。

その中に何かがあると仮定しよう。ここにいくつかの理論がある。

—言葉の暴力は、どんな場合にもかかわらず、身体的な暴力よりもよい。身体に傷を受けないので。

—男性は女性がもっと言葉を交わしたいという要求を理解し、もっと感情を表に出すことでその要求に応えるべきである。

男性と女性は、争いが起こった時の言葉の使い方についての単純なルールを学ぶべきであ

る。

－あらゆる面から問題を見してみる。

－ネガティブな面とポジティブな面を同じように見て、全体像を見極めるようにする。

－事が悪い方へ行ってしまうのはなぜかにばかり気を取られずに、責任のなすり合いをしないようにする。

－責任を受け入れる決意をする。

－勝つための議論(法廷モデル)をするのではなく、言葉の役割は、どちら側にも支配されない対話(対話モデル)と考える。

(田代美江子)